

下岡蓮杖

(一、八二三年〜一、九一四年)

わが国の写真師の草わけとして有名。文政六年(一八二三年)二月十一日、伊豆国の下田で、浦賀船政御番所判問屋桜田与惣右衛門の三男として生れる。幼名を久之助といった。狩野董川につき絵を学んだが、薩摩藩邸で写真を見せられ、その魅力にとりつかれた。写真を求めて江戸や長崎に行ったが、横浜で外国人居留地の雑貨商ショーヤーに雇われて住み込む。その頃、店先にアメリカ人の写真家ウンシンが店を開いた。蓮杖は、ウンシンの助手をやっていたラウダから写真の技術を教わ

り、後に、ウンシンから機械をゆすり受け、写真の道に進むことになった。

西区戸部に住み、写真の研究に没頭した。手洗いを暗室のかわりに使ったり、家主には「魔法使いを置くことはまかりならん」と追立てを強制されたり、先駆者としての例にもれず、かなり苦労をしたようである。こころした苦心のすえ、どうにか技術を会得した蓮杖は、野毛に写真館を開いたが、「写真に写ると生気を吸いとられる」という根も葉もないうわさが広まり、まったくはやらな

った。文久二年(一八六二年)七月、中区弁天通りに本拠をもうける。

この頃から、武士や志士たちが故郷の親などに写真を送るようになり客が増えてきて、店は大いに繁盛した。その後、中区大田町に「不二屋」という写真館を開く。

写真作品としては、江戸城、鉄道開業式の模様、新選組隊長近藤勇、唐人お吉など多数残っている。

蓮杖は、写真以外にも事業を行ない、明治二年には外国人の乗合馬車に対抗して馬車会社を、同五年には戸部で牛乳屋を開業した。

このほか、蓮杖は、浄瑠璃(じょうるり)を創作することを好み、その物語りの多くは、写真に関係したものであったといわれ、その一つである「横浜開港奇談」は、横浜の発展に祝意をこめた作品である。

なお、この作品の作者の自筆本は

神奈川県立文化資料館に保存されている。

晩年は、東京浅草に移り住み、大正三年、九十二歳の長寿をまっとうし写真にうちこんだ生涯をとじた。

